



【囃子指導者：岩井義則】演奏歴70年以上、主に町部や宝見地区で指導を行う町内最古参の囃子指導者の一人。笛を吹けなくなり、第一線を退いた今も、受け継ぎ体に刻み続けてきた鼓動を子どもたちに伝える。



↑今は息子の久幸さんが実技指導を担う。「まずはうまい人を見なさい」との岩井さんの言葉に従い、若者たちは真剣なまなざしでその指使いを追う。

「囃子」の音色を聞くと、誰もが祭りを思い起こす。笛が先導し、太鼓と鉦がリズムを刻んでいく。祭りに欠かせないこの旋律を指導者として後世に伝えてきた岩井喜則さん。金田本町で生まれ、幼少時から囃子に親しみ、72歳まで現役を続けました。今は第一線を退きましたが、要所を押さえた的確な指導で尊敬を集めています。楽譜のない囃子は「口伝」が伝統。鉦から始まり、小太鼓、大太鼓、笛と段階を経て、全て習得するまでに10年以上かかる

山笠を動かすのは囃子。苦しい時こそその鼓動が必ず引き手を奮い立たせる。



↑神幸祭の日は、必ず指導する町部の山笠を見に行く岩井さん。弟子たちから敬意を込めて「大匠匠」呼ばれる岩井さんの姿に、思わず笛の手も止まる。

受け継いできたこの囃子を絶やさず正確に伝えたい。



「囃子」の音色を聞くと、誰もが祭りを思い起こす。笛が先導し、太鼓と鉦がリズムを刻んでいく。祭りに欠かせないこの旋律を指導者として後世に伝えてきた岩井喜則さん。金田本町で生まれ、幼少時から囃子に親しみ、72歳まで現役を続けました。今は第一線を退きましたが、要所を押さえた的確な指導で尊敬を集めています。楽譜のない囃子は「口伝」が伝統。鉦から始まり、小太鼓、大太鼓、笛と段階を経て、全て習得するまでに10年以上かかる

習い伝わった伝統の旋律を
変わらない音色で次の世代へつなぐ

囃子 岩井喜則

Yoshinori Iwai



↑まとめた冊子には、各曲の出だしの笛の押さえ方や太鼓を打つタイミングなどが細かく記されている。時折それを見返し、再確認を怠らない。



↑先代までは無かった鉄砲を持つ人形なども制作。配置にも細心の注意を払い、山笠全体で物語をつむいでいく。



↑「じいちゃん、とうちゃんともっと仕事をしてみたかったですね」。今では2人の技を伝えるのは残された人形のみ。対話のように観察し技を学びとる。

富田人形の命は顔。
じいちゃんが生涯をかけ
築いた技と魂を守りたい。



【人形師：富田能央】幼少時から稼業を手伝い、基礎的な技術を学ぶ。一度は別の道を志したが、9年前に再度人形と向き合うことを決意。若い感性と妥協を許さない向上心で、日々新たな作品を生む三代目棟梁。

人形師 富田能央

Yoshinisa Tomita

魂受け継ぎ現代感覚で革新目指す
伝統守る富田人形の若き三代目



京 都の屋形山に由来し、博多祇園山笠の流れをくむ福智山笠最大の特徴は、合戦絵巻を表す勇壮な武者人形たち。初代・富田八十六氏が一代で築きあげ、今にも動き出しそうな形相の力強い作風で町内外から愛されています。その「富田人形」の三代目棟梁・能央さん（弁城）祖父の技をつなぐ一人です。人形作りを稼業とする家系ですが、一度は別の仕事に就いた能央さん。しかし二代目の父・泰昌氏と祖父を続けて亡くしたことから稼業を守ることが決意し、24歳にして現場を取り仕切る棟梁となりました。



↑初代から伝わる、飾りや人形の部品を切るためのたがね。同じものは今では作れず、補修を繰り返し打ち込んでいる。

常に時代を見据え
変化を目指しています。

「富田人形の指導は昔から「技は目で盗め」という職人気質のスタイル。幼少時から人形に関わる能央さんでも、その技を指導無しで得るには並々ならぬ苦勞がありました。祖父の代からの顧客を相手に、年上の職人仲間と作業する日々。常に重圧を感じる現場でも「先代までと必ず比べられる。その分飾りや細かい部品、モデルとなる武将の背景にも気を配ります」と一人一倍努力を重ねてきました。各時代の物語を忠実に再現しつつ、前例にとられない能央さんの作品は「柔軟で斬新」と依頼する地域から好評です。

今年、自身も「名誉なこと」と語る博多地区での展示も実現するなど、活動の幅を広げた能央さん。「祖父が残した技術、父が大切にされた地域や職人との信頼の上に今の富田人形がある。年々山笠を建立する地区が減る中で、人と人をつなぐ力を持つ祭りに人形師として力になりたい」とさらなる成長を誓いました。時代と向き合い、新たな作風を模索する挑戦は続きます。